

ロックウェル推薦図書 2012年3月

『車輪の下で』 ヘッセ／松永美穂訳

4月からの新年度、中学校の教科書が新しくなり、地区ごとの採択も変わります。新潟市の中学国語の教科書は久しぶりに光村図書になりました。光村の中1にはヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」が収録されているのですが、私はこの小説は教科書で読める文学作品の最高傑作のひとつであると思っています。

短編でありながら重層的な場面構成、緊迫感のあるストーリー、巧みな心理描写など、どれをとっても極上の小説で、自分の犯した罪と向き合う少年の物語は中学生にふさわしいものです。

美しいものに対するあこがれ、いわば芸術至上主義的な心情に共感できたときは、きつと自分が大人になった喜びを感じるでしょう。

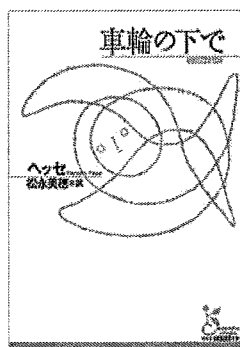
そこで今回はヘッセの紹介をかねて、代表作『車輪の下で』を取り上げることにします。

『車輪の下で』のあらすじ

ドイツ南部の田舎で生まれ育ったハンスは周囲の期待を一身に集める秀才です。二〇世紀初頭のドイツでは、ギムナジウムから大学に進学できるのは経済的に恵まれた家庭の子だけで、庶民の学業優秀な子には、「狭い一本の道」しか選択肢はありませんでした。国が地方の秀才を選りすぐるために実施する「州試験」に合格し神学校から大学の神学部に進み、司祭になるか教員になるという道です。

才能を見込まれたハンスは、放課後、校長からギリシャ語、牧師からはラテン語、数学の教師からは数学の特訓を受けなければなりません。受験勉強に不要なものはすべて取り上げられました。

頭痛と息苦しさに耐えながらも、ハンスは、村の職人や同級生たちの無教養さを馬鹿にし、優越感に浸る面もありました。



『車輪の下で』

しゃりんのしたで

ヘルマン・ヘッセ／松永美穂訳

光文社古典新訳文庫 ¥600(税込)

二位という好成绩で神学校に合格したハンスは、首席をめざして入学後も猛勉強を続けますが、やがて、奔放な生き方をするハイルナーと親しくなり、成績が下がり始めます。校長から「手を抜くと車輪の下敷きになる」と忠告を受けてもかつての従順な少年には戻りません。

ハイルナーが学校から脱走した後、ハンスは徐々に心身を衰弱させてしまいます。神学校を退学になったハンスは故郷に戻り機械工として働き始めるのですが、飲めない酒を無理に飲まれた夜、悲しい最期をとげるのです。

村でただひとり思いやりをもってハンスを見ていた靴職人のフライク親方は、自分たちのプライドのためにハンスを利用した校長や牧師たちがハンスを殺したのだと語ります。

学歴社会の日本人にはわかりやすく共感を得やすいこの作品のなかで、牧師とフライクはキリスト教の教義の違いを暗示する奥の深い存在です。

話が戻りますが、世間知らずの少年と大人びた危険な生き方の少年との出会いもヘッセの作品の主要なテーマです。

ヘッセの生涯

ヘッセ(1877-1962)は、ドイツの作家・詩人で、和暦なら明治10年生まれになります。『車輪の下で』はヘッセの自伝的小説で、神学校を退学させられたハンスはヘッセの姿です。ただ、ハンスほど繊細で弱い人間ではなかったようで、精神を病み、職を転々としながらも、詩人になるという夢をかなえ、小説家としても成功をおさめます。

新訳と題名

定番の高橋健二訳では「車輪の下」とされていますが、今回推薦の松永さんは「車輪の下で」としました。その意図は訳者あとがきをご覧ください。

光文社古典新訳文庫はおすすめです。

日本人は西洋文学を高尚なものと受け止めたために、原作のユーモアやおもしろさがそこなわれてきました。現代人にわかりやすい言葉になっただけではなく、深く理解できるようになったのです。